

薩摩の近代化が現代に何をもたらしたのか？

株式会社島津興業 仙巖園 学芸員 岩川 拓夫

1 明治日本の産業革命遺産と島津斉彬

2015年に世界文化遺産に登録された「明治日本の産業革命遺産」は、「欧米以外で、自らの国の民衆が中心となって、短期間のうちに産業革命を成功した唯一の事例」を伝える建築物や史跡によって構成されている。欧米諸国の場合、自国民が自国のために産業革命を進めたのに対し、他の地域では植民地によって入植してきた人々が、母国や入植者の利益のために産業革命をすすめている。そのような中で日本は西洋諸国と同様、日本人が日本のために産業革命をすすめた。その背景には鎖国下においてすすんだ我が国の「匠の技」の存在が挙げられる。ものづくりの力と、海外から入ってきた知識を融合させながら独自の産業革命を目指したことが特徴であろう。

その産業革命をけん引したのが、島津家28代斉彬である。彼は琉球王国経由で海外から情報得ることができる薩摩藩を治める家柄に生まれたことに加え、40歳過ぎまで世子（世継ぎ）であったことから江戸を中心とした交流の中で幕閣、諸大名そして知識人から様々な知識・情報を入手することができた。その斉彬が藩主となって鹿児島城下に築いた日本初の近代工業地帯が「集成館」である。この地を中心に製鉄事業をはじめ、造船、薩摩切子や金襴手薩摩焼、写真、活版印刷の各種事業を進めた。

2 斉彬の志と現代日本

斉彬の死後、藩主に就任した29代忠義は、実父で「国父」と称された久光とともに斉彬の事業を継承する。薩英戦争以降、急速に接近したイギリスの協力を得て日本初の近代紡績工場・鹿児島紡績所を設立。イギリス人技師のために建てた宿舎は現在も旧鹿児島紡績所技師館として残っているほか、斉彬時代の工場群の跡地に設立した旧集成館機械工場も今に受け継がれている。これらは洋風の外見でありながら、我が国の建築技術などが垣間見られることから薩摩藩士によって建設されたものと考えられる。

斉彬たちによる産業革命の諸事業は、明治維新後に全国へと飛躍した。製鉄事業は、水戸藩の那珂湊を経由して、橋野高炉に技術がもたらされ、官営八幡製鐵所につながっている。紡績事業は鹿児島紡績所と同じく薩摩藩が築いた堺紡績所で活躍した技術者が全国にはばたくが、近代に紡績事業が発展した結果、紡績機械の製造も進み、トヨタ自動車の源流にあたる豊田自動織機も設立された。造船・海運事業では、斉彬のもとで活躍した海商・浜崎太平次のもとで励んだ川崎正蔵が、川崎財閥につながる海運・造船業を築いている。

長崎に小松帯刀・五代友厚らが建設した小菅修船所は三菱やキリンビールの源流のひとつとなり、斉彬が開拓を提唱していた蝦夷地に、イギリス留学を経てサッポロビールの設立にあたった村橋久成をはじめ、明治時代は多くの薩摩出身者が北海道の各事業に携わった。幕末・維新に培われた技術と、発展に向けた情熱が、時代を、地域をこえて、今の日本の礎になっているのである。